

日本人スポーツ選手の海外移動とキャリア形成に関する一考察

高橋義雄・佐々木康

はじめに

日本人スポーツ選手の海外移動と言えば、プロ野球、社団法人日本野球機構(以後:N P B)の日本ハムファイターズのダルビッシュ有のアメリカメジャーリーグ(以後:M L B)テキサスレンジャーズ移籍がニュースになったのをはじめ、2012年にN P Bの一軍選手でM L Bへ移籍する日本人は青木宣親、岩隈久志、川崎宗則、和田毅がいる。

サッカーでも日本人選手が海外のクラブで活躍する事例が見られ、2011年11月現在の日本代表選手23名中11名が海外のクラブに所属している。またロンドン五輪予選を戦った女子サッカー日本代表選手20名中4名が外国クラブに所属し、女子サッカー選手における海外移籍のスポーツキャリア形成についても注目する必要がある。

昨今では、個人球技種目で体操男子のアテネ五輪団体総合金メダリストの塚原直也が国籍取得によってオーストラリア代表としてロンドン五輪への出場を目指して同国に体操留学した事例や、マラソンでカンボジア代表を目指してカンボジア国籍を取得した猫ひろしの事例がある。

いっぽう、スポーツ指導者としても、井村雅代が2008年の北京オリンピックにむけてシンクロナイズドスイミング中国代表チームの監督に招聘され、サッカーワールドカップ南アフリカ大会でベスト16の成績を残した前日本代表監督として岡田武史が、中国スーパーリーグ(中国サッカー1部リーグ)の杭州緑城の監督に就任した。このように選手のみならず、日本人スポーツ指導者が海外でスポーツ労働者として職を得る事例がみられるようになった。

本研究では、スポーツ選手やスポーツ指導者の「海外移動」の定義を、特に海外の国籍を取得することを必要な条件とは考えず、出身国外に競技活動や競技指導の主な拠点に移すこととした。そして日本人選手が海外に拠点を移す「海外移動」が、その選手のその後のキャリアの形成に与える影響について、まずスポーツ選手の海

外移動研究を渉猟しスポーツ選手の海外移動に関する先行研究の動向を踏まえる。さらに日本のプロスポーツ種目の野球とサッカーの日本人選手の海外移動の事例を検討する。そして最後に他の球技種目の日本人選手や指導者の事例についても文献資料を用いて分析し、日本人スポーツ選手の海外移動がキャリア形成に与える影響について検討することを目的とする。

1. スポーツ選手の海外移籍に関する先行研究

スポーツ選手の海外移動は、スポーツ界のグローバル化、スポーツの職業化とともに生じてきた。これまでスポーツ地理学者やスポーツ社会学者、社会史研究者によってほぼ四半世紀以前からスポーツ選手の海外移動については議論がなされている(Bale & Maguire(1994)、Maguire(1999))。スポーツ地理学では、スポーツ選手の海外移動の事例をマッピングし、選手を供給する地域と受け入れる地域を地理的に明らかにしている。スポーツ社会学領域では、スポーツ選手を送り出す側と迎える側の文化的な衝撃や適応などの研究、彼らが出身国と移動した国の両国を媒介することの役割、そしてファンや選手自身への影響といった側面、次に国家単位のスポーツ団体の反応、三点目にスポーツ選手のグローバルな移動の影響としての地域と国家のアイデンティティへの認知について注目が集まっている。スポーツ選手の海外移動を扱う社会学研究の理論的フレームには、機能主義的な近代化論を援用してスポーツの近代化によって生じるスポーツ選手の移動を取り上げる見方、スポーツ選手が集中して集まる現象をマルクス主義的な側面から資本の世界的な拡散と西欧の帝国主義的な構造から植民地と位置づけられる地域からスポーツ選手を技術労働者として調達すると分析する見方、またウォーラースタインの世界システム論の政治・経済的なつながりを踏まえてコア(中核)地域とプリフェラル(周辺)地域の格差によってスポーツ選手の移動が生じると捉える研究がなされている。

以上のような先行研究を踏まえれば、日本人スポー

選手がプレーする出身国の日本は、経済的には西欧諸国に匹敵もしくは上回る「中核」に位置づく国であり、第三国や周辺国からスポーツ労働者が流入する国にあたると思われる。実際、日本で活動する外国籍選手が存在するものの、日本人スポーツ選手の活動機会の確保のために外国籍選手の参加に制限がなされている。いっぽう、スポーツの近代化論でみれば、学校や実業団のスポーツにみられるアマチュアリズム的な意識が、日本のスポーツの商業化、そして産業化を妨げていることから、日本ではプロスポーツ化した競技が限られることも事実である⁽¹⁾。このことから地球規模で考えれば、日本の政治・経済的な地球上でのポジションと日本のスポーツの近代化の程度には落差があるとも考えられる。

いっぽうスポーツ選手の海外移動のパターンを Maguire (1999) は 5 タイプに分類している (図 1)。Maguire (1999) は、まず「Pioneers (パイオニア)」とされる、19 世紀に宣教師や Sokol (ソコール運動)、20 世紀の Y M C A のような熱狂的に目的を持ってスポーツの普及のため異国へ渡ったスポーツ労働者、次に「Settlers (移住開拓者)」と区分されるゲーリックスポーツ、カバディ、バスケットボール、アイスホッケーなど、スポーツ以外で移住した先においてスポーツを伝えた移住者、そして第三に「Mercenaries (傭兵・報酬による雇用者)」とされるアメリカンフットボールのワールドリーグの選手やスポーツ用品メーカーの Rebel Sport の名前がついたラグビーツアーなどの報酬目当てで海外移動する選手、第四に「Nomadic cosmopolitans (定住しない放浪者)」としてスポーツキャリアを活かして旅をするマラソンランナー、サーファー、エクストリームスポーツ選手、そして最後に母国と海外を行き来する「Returnees (出国して帰国する人)」と区分される F 1 レーサーやゴルフやテニスのツアー選手に分類している。

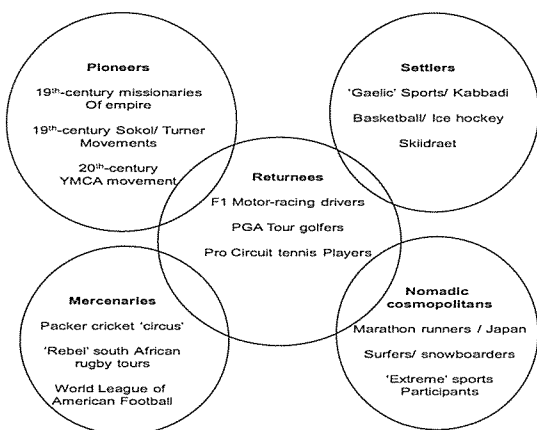


図 1. Typology of sport labour migration (Maguire(1999), p.106)

また Magee & Sugden (2002) は、サッカー選手の海外移動のパターンについて Maguire (1999) の研究をイングランドのサッカーリーグ所属選手に対する具体的インタビュー調査で補強し、6 タイプに区分した (図 2)。Magee & Sugden (2002) の分類では、プロのスポーツキャリアへの強い思いや、高いステージへの挑戦、さらに質の高いステージへ移動することでキャリアを高めたいという思いで海外移動する「Ambitionist (願望型)」のタイプ、国内の政情不安などで出身国から逃れなければならない「Exile (亡命型)」タイプ、そして母国のサッカー関係から締め出されたり、選手自身の抱える問題やメディアによる追突などで母国ではプレーすることができなくなり、スポーツキャリアを継続するために強制的に海外移動する「Expelled (追放型)」タイプが追加されている。先行研究では、スポーツ選手の海外移動の要因が複数のタイプに分類されているが、個々の選手の海外移動のタイプによってその後のキャリアに与える影響は異なってくるのが予想される。

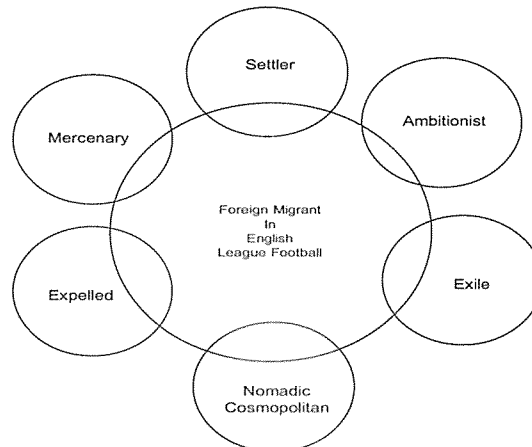


図 2. A Typology of Football Labor Migration (Magee & Sugden(2002) p.430)

日本に関する海外移動に関する研究では、日本への外国人サッカー選手の流入について言及した Lanfranchi & Taylor (2001)、ほかに Magee & Sugden (2002)、千葉 (2003) がある。また日本人サッカー選手の海外移動の経年的な変化および移籍の要因について高橋 (2004) や Takahashi & Horne (2004) が考察している。野球選手の海外移動については、Chiba et.al. (2001) が日本のチームに移動した外国人について論述し、Hirai (2001) は N P B から M L B に移動した野茂英雄について論及している。また Takahashi & Horne (2006) が日本人野球選手の海外移動の経年変化について分析している。しかし日本人スポーツ選手の海外移動の歴史が浅いこともあり、海外移動がその後のキャリア形成への影響について論じた研究は少ないのが現状である。

2. サッカー選手の海外移動

日本人サッカー選手の海外移動に関する研究は、高橋（2004）やTakahashi & Horne（2004）に詳しい。高橋（2004）は、Jリーグ開幕後の1990年後半から日本人サッカー選手の海外移動が増加しているとし、その要因を選手個人の「心理的な要因」と「技術・適応能力的な要因」、そして選手を取り巻く「社会・制度的な要因」に分けて説明している。「社会・制度的な要因」の側面では、日本のサッカー選手の海外移動は、プロ化と同時に国内のプロサッカービジネスが発達し、先にプロ化して商業化した海外のサッカービジネスと関係を持つ中で増加していったと分析できる。またワールドカップ出場を契機に日本人選手の技術も海外に知られるようになり、選手の移籍を促進するエージェントのネットワークにリストアップされるようになった。経済大国日本の資本は、日本企業の海外進出とともに現地のサッカーへ投資をはじめ、その投資が日本人選手の海外移動を促進させているという側面もある。Takahashi & Horne（2004）は、Magee & Sugden（2002）の方法で日本人サッカー選手の海外移動のタイプを分類し、長年海外に定住することを目的で海外渡航し、さらにサッカー選手でいるような「Settlers（移住開拓者）」の選手が少なく、他の区分に相当する選手の事例は見られることが述べられている。「Settlers（移住開拓者）」タイプはサッカー以外の就労が認められる必要があり、労働ビザや定住権、市民権の取得が障壁になっていることが考えられる。

高橋（2004）以降、2012年の今日まで日本人サッカー選手を取り巻く社会・経済的環境は変化しているが、その後続く研究は見られない。昨今では日本の第2次産業が東南アジアに工場を移転し現地との関係をさらに強めていることや、アジア地域の消費拡大とともにアジア地域での商品の広告宣伝が必要となっており、例えばタイでは、トヨタ自動車協賛するトヨタプレミアカップというサッカー大会が開催され、日本のJリーグクラブが招待されている。またタイのプロサッカーリーグには元Jリーグ選手を中心に20人の日本人選手が海外移動してプレーをしている。最初の日本人選手の一人である丸山良明は、タイサッカー界の英雄と言われ日本の実業団サッカーの経験のあるビタヤ監督を通じて入団、その後日本で契約ができなかった選手がタイへ海外移動した。2011年には太田敬人がタイのクラブからカンボジアのクラブに移籍し、カンボジアの日本人初のプロサッカーの選手となっている⁽²⁾。これらの事例は、Magee & Sugden（2002）の分類で

は、日本でプロサッカーの契約が取れず母国から追い出され、しかしプロサッカーを続けるために海外移動する「Expelled（追放型）」、もしくはサッカー技術を活かして滞在先の国での生活を一時的に楽しむ「Nomadic cosmopolitans（定住しない放浪者）」といえるかもしれない。

3. 野球選手の海外移動

日本人野球選手の地理的な移動と野球のキャリア形成については、竹内・高橋（2006）が高校生球児について分析し、国内での移籍、つまり県外への進学でさえ他の競技と比較して自由度の低いものであることを述べている。移動の自由度の低い日本の野球環境では、多くのNPB選手が国内の高校野球部や大学野球部でキャリアを経験し、国内の野球クラブや海外の野球クラブだけしかキャリアのないNPB選手はめずらしい⁽³⁾。現在、NPB選手の野球キャリアを得るためには、ドラフト指名されて入団交渉するほか、育成ドラフトの指名を受けて支配下選手登録枠外の育成選手として所属することになる⁽⁴⁾。

こうしたドラフト制度は、日本国内での労働者としての野球キャリアを制限する制度であるが、プロ興行を行う球団間の戦力均衡や競争制限による球団の選手獲得費用の削減に寄与している。2004年度、NPBとの交渉権を得るドラフト制度の改定があり、高等学校3年在籍の野球部員や大学4年在籍の野球部員は、日本高等学校野球連盟や全日本大学野球連盟傘下の大学野球連盟に「プロ志望届」を提出しないかぎり、大学進学もしくは一般企業就職希望者としてドラフト指名を受けることができなくなった。そのためNPB選手になることなく海外での野球キャリアを経験するためには、プロ志望届を提出せずNPBのドラフト指名を受けない、つまりNPB選手キャリアを閉ざして海外へ移籍することになる⁽⁵⁾。もしNPBに対してプロ志望届を提出してドラフト対象選手となった場合、ドラフト会議の指名を拒否して海外球団と契約すれば、高校生は帰国から3年間、高校生以外は帰国後2年間ドラフト指名凍結選手となり、海外球団からNPB選手に戻る際に制限が科され、競技力の維持に問題が生じる危険性がある。この制度導入の背景には、2008年にNPBのドラフト上位指名が確実視された田澤純一がNPB球団にドラフト指名しないよう要望し、MLBボストン・レッドソックスと契約したことが「田澤問題」として取り上げられ、NPBに所属せずに直接MLBに入団するアマチュア選手が増加すればNPBが空洞化する懸念があっ

たためである⁽⁶⁾。

いっぽうでNPBやMLBとの契約には至らないものの、アメリカ独立リーグ、カナダ独立リーグ、メキシコリーグ、オランダリーグ、イタリアリーグ、オーストラリアリーグなどで野球キャリアを継続している日本人が存在する。これらの国では、NPBやMLBと比較して給与が低く、競技環境は悪い。そのため野球キャリアの延長として機能するが、NPBやMLBの選手になる事例はみられない。これらの野球キャリアを経験した者の中には海外での野球キャリアを活かして、日米の野球留学やコーチ研修などの派遣業務を営む事例も存在する。ただし海外での野球キャリアがスポーツキャリア形成、さらには野球活動を終えた後のセカンドキャリアに与えた影響を分析した研究はない⁽⁷⁾。

次に日本人野球指導者であるが、MLBで野球の技術指導をする日本人指導者は現在まで誕生していない⁽⁸⁾。海外で野球普及のために指導する日本人野球指導者であれば、元阪神の吉田義男が、1989年から1996年までフランス代表監督を務めその貢献が評価されてフランス野球・ソフトボール連盟の名誉会員に選ばれている。また海外での野球指導には、国際協力機構青年海外協力隊の隊員の存在がある。青年海外協力隊での野球指導経験はプロ球団への所属とならないため、派遣期限が切れて帰国後にアマチュアの野球指導者になることができる。日本では元プロ野球関係者が高校や大学野球部の指導者になるための制限があるために、NPB経験者のなかには、韓国のKBO球団と契約し韓国に拠点を移す事例もみられる。

4. その他のスポーツ種目の事例

サッカーや野球以外に海外移動をしている事例が見られるスポーツ種目には、テニスやゴルフのような海外を転戦するツアー競技、日本以上に商業化している中国の卓球や、クラブのリーグ戦が整備されて世界のトップ選手が参戦するドイツの卓球やスペインのハンドボールの事例がある。またスキーやスノーボード、スケートのような雪や氷などの地球上の特定の地域を拠点にするスポーツも季節とともに北半球と南半球を移動することになる事例である。

例えばテニスは、男子は1972年に設立した男子プロテニス協会（以後；ATP）、女子は1970年設立の女子テニス協会（以後；WTA）に登録し、下部大会で勝利することでポイントを稼ぎ、世界ランキング順位をあげて世界で開催されるトーナメント大会に出場することになる。ATPの大会で世界を転戦する日本人

選手は、2012年1月16日現在でランキング1794位の竹田直樹まで44人、女子のWTAランキングには64名の選手がいるが、日本国内の下部大会で勝利してポイントを稼ぐ必要があるために海外を拠点にする選手は少ない⁽⁹⁾。テニスの日本人選手の海外移籍として考えられる事例は、世界ランキング24位を経験した錦織圭である。錦織圭はアメリカのフロリダ州を拠点に活動している。錦織圭は、アメリカフロリダ州の国際テニス選手養成学校であるニック・ポロテリーテニスアカデミーに留学しており、また現在も出身のアカデミーを運営するスポーツエージェント企業と契約する関係や日本国内の大会よりも世界のトップレベルの大会を転戦するため、帰国を考えない「Nomadic cosmopolitans（定住しない放浪者）」として海外移籍を継続したものにしていると考えられる。

ゴルフ選手は、自らが拠点として所属するクラブでの指導などで収入を得るクラブプロ、ゴルフ指導料で収入を得るレッスンプロ、そして大会に参加して賞金を稼ぐツアープロに分類される。日本人ゴルフ選手の海外移籍を分析するには、主に海外ツアーに参戦するツアープロの分析が必要である。アメリカが中心となるPGAツアーには、10人の日本人選手が登録されている。中でも今田竜二は14歳で単身渡米後、PGAツアーを中心に参戦し、2011年では29試合すべてがPGAツアーであり「Nomadic cosmopolitans（定住しない放浪者）」として海外移籍を果たした日本人ゴルフ選手とすることができる。ヨーロッパツアーでは、ツアー参加資格を得るためには「Q School」と呼ばれる3次にわたる予選会を30位以内で通過する必要がある。またその年のツアー参加資格を得ても、その年にツアー優勝するか指定された大会の獲得賞金総額の成績が115位内でない資格が継続されない。2011年現在、日本人選手でヨーロッパツアー参加資格を唯一もつ平塚哲二は2011年に年間24試合中13試合の日本の試合に参戦、そして残りの11試合の海外ツアーに参戦している。その参加した海外大会はインド、スペイン、モロッコ、マレーシア、中国、韓国、タイ、フランス、スコットランド、イギリス、アメリカとなる。平塚哲二の公式HPによれば、日本を拠点にしながらい国内と海外を行き来して転戦する「Returnees（出国して帰国する人）」タイプのゴルフ選手である。平塚を取材した井上⁽¹⁰⁾は、平塚が日本と海外の試合を転戦する過酷な日程でも試合出場する理由を、「もっともっとうまくなりたんですよ。そのために考えていることが、”ゴルフをし続けることで、ゴルフがうまくなる”とい

うことですよ」と紹介しており、「Ambitionist (願望型)」のタイプとも分析できる。

そのほか卓球では、福原愛が中国の卓球クラブに、そして水谷隼や岸川聖也がドイツリーグに参戦するためにドイツに海外移動する事例がある。背景には日本卓球協会の強化戦略があり、彼らは学校教育の年代から卓球強化のための学校に国内移動した経験をもっており、卓球のために移動することを厭わない「Ambitionist (願望型)」のタイプと考えられる。またハンドボールの日本代表選手の宮崎大輔のように日本ハンドボール協会の強化指定選手としてスペイン・バルセロナへ留学する事例もある。

5. 考察

サッカー、野球、その他の種目について海外移動の事例を紹介してきたが、海外移動後のキャリア形成については、海外移動にタイプがあるように、多様で複合的な要因があるために慎重な分析が必要である。サッカーでは、近年でこそ、多くの日本人サッカー選手の海外移動の事例が見られるもののその歴史は浅く、その後のキャリア形成について今後とも調査していく必要がある。例えば日本のサッカーの評価が低い初期に海外移動した選手は日本国内ではサッカー選手として高く位置づけられ、帰国後もサッカー関連の指導者やテレビ解説者に登場することもある。いっぽうで練習生や控え選手であっても海外でプレーする願望だけで海外移動する「Ambitionist (願望型)」のタイプは国内のクラブから飛び出していく関係から帰国後の日本国内での仕事に影響が残ることが考えられる。また最近ではオランダからロシアへ移動した本田圭佑のようなサッカー技術が海外から認められて海外移動する「Mercenaries(傭兵・報酬による雇用者)」タイプの選手もいる。これらの事例は現在も現役続行中であり、引退後のキャリアを決定する要因の研究が求められる。また Takahashi & Horne (2004) が「Expelled (追放型)」とした中田英寿は、サッカー選手引退後も社会運動とビジネスを連動させた新しい企業家として日本のサッカーではない職域で活動している。「Mercenaries(傭兵・報酬による雇用者)」の経験が彼の知名度を高めてそれがキャリアに影響している。また近年の事例で紹介した「Nomadic cosmopolitans (定住しない放浪者)」型の海外移動はサッカー選手引退後に指導者として同じように「Nomadic cosmopolitans (定住しない放浪者)」タイプで生活するのか、海外現地で仕事を得ることで「Settlers (移住開拓者)」として定住するキャリア選択

するのかについては事例の研究が必要である。いっぽうでサッカーの場合は、国内でもJリーグクラブの増加によるプロ選手契約数の増加や、クラブ増加による指導者やスタッフ職といった雇用の増大があり、海外とのビジネスを始めるサッカークラブであれば、サッカー選手としての海外移動経験が求められるようになるかもしれない。

次に野球であるが、MLBを中心に中米が取り巻くベースボール市場を頂点に、アジアのNPB、続いてKBOと台湾プロ野球などが興行として成立している事情から、これまではお互いの興行ビジネスに配慮して、プロ選手の海外移動についてはリーグ間にポスティング(入札)の取り決めがあり、次世代の優秀なタレントの流出を食い止めるべく日本でも海外移動を経験させない仕組みを形成してきた。たとえ「Mercenaries(傭兵・報酬による雇用者)」としてMLBに移動しても、移籍の契約でもめるなどした結果、日本のNPBやメディアとの関係が「Expelled (追放型)」である場合には帰国後のキャリアに影響があると考えられる⁽¹¹⁾。しかし1990年以降の日本では優秀な野球選手の育成と若手選手のプールとなってきた社会人野球チームが解散するとともに、海外のチームで野球をする日本人も増加した。プロ野球選手の海外移動によるキャリア形成への影響は、事例が1995年の野茂英雄の海外移動から増加するため、今後の研究が待たれる。いっぽうでサッカーと比較するとプロ野球チームの数は増加せず、プロとアマの垣根が高い日本ではプロ選手が野球指導者として学生選手を指導するキャリアに制限があり、また新たな職場としての独立リーグの経営も難しいため、野球の指導者やスタッフ職でのキャリア形成は難しいものとなっている。

最後にその他の種目において海外移動が可能なスポーツ選手は、国内での一流の成績を残すことができる世界レベルの実力を持っており、その貴重性が引退後のキャリア形成に影響を与えると考えられる。例えば、青木功はゴルフのPGAツアーに所属しているもののその年齢からツアー参戦することはないが、日本国内では著名なゴルファーとしてキャリア形成している。このように国内においてプロスポーツとして成立している場合はその競技種目に関連するキャリアの形成が可能であるが、日本国内でアマチュア中心の種目の場合は指導者として実業団コーチや教育職のキャリアに限られることになり、海外移動がプラスに働くかどうかについては事例の検証が必要である。

まとめ

日本人スポーツ選手のキャリア形成に及ぼす海外移動の影響についてサッカー、野球およびその他の競技種目の状況を述べてきたが、海外移動に至った経緯や要因によって、スポーツキャリアの延長や社会的ステータスの獲得に働くケースがあるいっぽうで、国内とのネットワークが途切れることで、帰国後のキャリアに影響する可能性も論じられた。

近年では、報酬を当てにした海外移動ではなく、「スポーツを高いステージに挑戦したい」、「日本では契約ができないから」という理由で海外移動するタイプもあり、キャリア形成という視点からその後の経過を注視していく必要性も述べられた。本研究は文献資料に分析素材を依存していることから、記事やウェブ上の発はメディアを通じた発言として一定の建前が存在することも考えられ、海外移動がその後のキャリア形成にどのような機能を果たすかについては、海外移動経験者の情報を収集するとともに、メディアに登場しなくなる（スポーツキャリアの継続を断念する）選手については、直接的なインタビュー調査が必要である。最後に、スポーツ選手がキャリア形成を考えると、海外移動がキャリア形成においてすべてにプラスに働くわけではなく、その背景や要因、移動の経緯などを慎重に検討するし判断する必要があると考えられ、今後も本研究の視点は重要であると考えている。

(注)

- (1) バスケットボールやバレーボールは学校や実業団スポーツとして発展してきた経緯からプロ化を目指してはプロ化が競技団体内部から反対されるなど、競技の商業化が進まない。
- (2) 山口優の From Cambodia with Football にカンボジアでプレーする太田敬人が書かれている。(http://www.qoly.jp/index.php/special/184-special/4469-cambodia 平成 23 年 1 月 29 日確認) 太田は、「Jリーグでプレーしたいという気持ちは無いのだろうか?」という質問に対して「今は…無いですね。外国でプレーする事によって、試行錯誤する事によって、サッカー選手としてだけではなく、全ての面で成長出来ると思っています」と答えている。
- (3) 2004 年に米国のマタデーハイスクール出身で日本の高校野球キャリアのなく阪神タイガースのドラフト 8 位に指名された選手に辻本賢がいる。
- (4) 1991 年まではドラフト指名数が制限されており、ドラフト外で入団する選手がいたが、ドラフト制度

の形骸化との指摘があり、現在ではドラフト外入団の制度はない。

- (5) 野球技術の高く、プロ選手の職業を希望するのであれば NPB 入団を希望しない場合を除き、プロ志望届提出をすることが多い。
- (6) 日米間にはアマチュア選手に獲得に関する明文化された協定がなく、ドラフト候補選手とは交渉しないという紳士協定の状態である。そのためポスティングシステムで日本から有望な選手を獲得したい MLB チームは高額な移籍金がかかるため、海外の若いアマチュア選手といち早く入団交渉を行い、低額での契約を目的とした「世界ドラフト」の構想も MLB ではもちあがっている。ちなみに NPB のキャリアがなくアマチュアから MLB に入団した日本人選手にはマック鈴木、多田野数人、田澤純一がいる。
- (7) 世界の野球情報を取材する石原らの記事から海外で野球選手として生活する日本人のことがわかる。(http://koko.weblogs.jp/koko/cat5680355/ 平成 23 年 1 月 29 日確認) また株式会社ベースボールコミュニケーションは、海外での野球経験を持つものが野球海外留学事業を行う企業の一例。(http://www.baseball-com.jp/40/ 平成 23 年 1 月 29 日確認)
- (8) MLB ニューヨーク・メッツのコンディショニングコーチには立花龍司が就任した事例がある。
- (9) ATP 公式 HP で国籍別のランキングを表示することができる。(http://www.atpworldtour.com/Rankings/Singles.aspx?d=16.01.2012&r=0&c=JPN 平成 23 年 1 月 29 日確認)
- (10) 井上兼行の「今年 40 歳の平塚哲二の生き方。世界で戦うとはこういうことだ!」に紹介されている。(http://sportsnews.blog.ocn.ne.jp/column/others111012_1_1.html 平成 23 年 1 月 29 日確認)
- (11) 野茂英雄や伊良部秀輝の事例をみると、移籍交渉で出身チームともめた結果、引退後の選手を中心に指導人やスタッフ、さらには解説者などを形成する日本の野球チームにおいては仕事につくことが難しいことがわかる。

参考文献

1. Bale, J. and Maguire, J (eds); *The Global Sports Arena: Athletic Talent Migration in an Interdependent World*, Frank Cass Publishers, 1994.
2. Maguire, J.; *Global Sport*, Poliy Press, 1999.
3. Magee, J. and Sugden, J.; *The World at Their Feet: professional football and international labor migration*, *Journal of Sport and Social Issues*, 26, pp.421-437, 2002.
4. Lanfranchi, P. and Taylor, M.; *Moving with the Ball: the Migration of Professional Footballers*, Berg, 2001.
5. 千葉直樹；ワールドカップにみるグローバルなサッカー労働市場，現代スポーツ批評，Vol.8, pp.126-135, 2003.
6. 高橋義雄；日本人Jリーグ選手の国際移籍の要因に関する研究，スポーツ産業学研究，Vol.14(1), pp.13-22, 2004.
7. Takahashi, Y. and Horne, J.; *Japanese football players and the sport talent migration business*, *Football Goes East Business, Culture and the People's Game in China, Japan and South Korea* (eds. by Manzenreiter, W. & Horne, J.), pp.69-86, 2004.
8. Chiba, N., Ebihara, O. and Morino, S.; *Globalization, naturalization and identity: the case of borderless elite athletes in Japan*, *International Review for the Sociology of Sport*, 36, 2, pp.203-221, 2001.
9. Hirai, H.; *Hideo Nomo: Pioneer or defector?*, *Sport Stars* (eds. Andrews, D. and Jackson, S.), pp.187-200, London, Routledge, 2001.
10. Takahashi, Y. and Horne, J.; *Moving with the bat and the ball The migration of Japanese baseball labour, 1912-2009*, *Sport And Migration Borders, Boundaries And Crossing*(eds. by Maguire, J. and Falcous, M.), pp.46-55, 2006.
11. 東京新聞，2011年12月7日.
12. 竹内一郎・高橋義雄；高校生球児の野球留学とキャリア形成の諸問題，生涯学習・キャリア教育研究，第2号，pp.39-44，2006.

Sporting career development and the migration of Japanese athletes

TAKAHASHI Yoshio* & SASAKI Ko**

The migration of Japanese sports talent as athletic labour has gradually become more popular in the past 20 years. At the same time, the career development and career transition of athletes has become a big issue in Japan. In this study, we considered the effect of global migration on the career development of Japanese athletes. We used the typology of sport talent migration introduced by Maguire (1999) and Magee & Sugden (2002), and categorized Japanese cases by those typologies. Some cases of football (soccer), baseball and other sport players were analyzed. The results suggested that modernization, industrialization and commercialization of each sport have impacted on the factors of migration. In the case of a globally commercial sport, football, there are many chances to be a professional in the world. Moreover the Japanese professional football

market has expanded recently. Players can get a reputation through migration and get a job in the football industry, like coach, club staff and media commentator, when they come back to Japan. In baseball however, there is a barrier to the exchange of professionals and amateurs, consequently it is difficult for migrating players to get a baseball related job in Japan. These results indicate that the impacts of migration on career development are complex, and careful discussion and analysis is required. For future research it is necessary to increase a number of cases and direct interviews with the athletes.

*University of Tsukuba

** Nagoya University